

# 日本語と韓国語の複合移動動詞

和田学

(山口大学人文学部)

wadagaku@yamaguchi-u.ac.jp

キーワード：複合移動動詞，日本語，韓国語

## 0. はじめに

本稿では、日本語と韓国語の複合移動動詞について論じる。複合移動動詞とは、「食べに行く/mek-ule ka-ta」の様に、移動動詞に先行する動詞が移動の目的を表わす形式を指す。日本語の複合移動動詞について、派生の最終段階で単文構造をなすという点では研究者の見解は一致しているが、Miyagawa (1987)は複文構造からの派生(再構造化)により単文構造が得られるとするのに対し、Matsumoto (1996)は、最初から単文構造であるとしており、見解が対立している。本稿では、1節で複合移動動詞の単文的特徴を概観し、次いで、2節でMiyagawaとMatsumotoの見解に触れる。3節では、韓国語の複合移動動詞が日本語の複合移動動詞と殆ど同じ特徴を持つことを示した上で、日本語にはないタイプの否定辞と複合移動動詞との相関関係を示して、これが複合移動動詞が複文構造から派生するとする立場に対して決定的な反論となることを示す。

## 1. 複合移動動詞

日本語には「行く」「来る」など移動を表す動詞が動詞の連用形にニが接辞化した形式と共起し、後者が移動の目的を表す構文がある。動詞連用形+ニ（以下、目的動詞）は移動動詞から離れた位置にも現れ得るし、移動動詞の直前にも現れ得る。

(1) a. 山田は本を読みに行つた

b. 山田は図書館に本を読みに行つた

(1a,b)例が表面的な類似性にもかかわらず、様々な違いを見せることが、Miyagawa (1987), Matsumoto (1996)等により、論じられてい

る。それらの論考によると、目的動詞が移動動詞から離れた位置にある場合、目的動詞が独立した節を形成し、文全体が複文であることが明らかであるのに対し、目的動詞と移動動詞が隣接している場合には、文全体が単文であることを示す特徴が現れ、目的動詞と移動動詞が一つの複雑述語を形成していることを示唆する。以下では Miyagawa と Matsumoto の観察を概観する。

まず、第一に、目的動詞と移動動詞が離れている場合には、目的動詞が取る項や付加詞の後ろに移動動詞を修飾する副詞などを置くと不適格になる(Miyagawa (1987), Matsumoto (1996: 239))。具格を伴った「自転車で」は、明らかに主節の移動動詞を修飾する要素であり、それを「買いに」とその目的語の間に置くことはできない。

(2) \*太郎が本を自転車で買いに神田に行った(Miyagawa (1987))  
この事実は、目的動詞が独立した節を形成すると考えると容易に説明がつく。(3)に示した様に、一般に、複文構造において、従属節の内部に主節の要素を混在させることはできないが、(2)の不適格性は、(3)と同様、(4)の構造を持つために不適格になると考えることができる。

(3) a. 太郎が双眼鏡で[花子が車を盗んだのを]見た (Miyagawa (1987))

b. \*太郎が [花子が車を双眼鏡で盗んだのを]見た

(4) \*[太郎が[本を自転車で買いに]神田に行った]

これに対し、目的動詞が移動動詞と隣接している場合には、目的動詞の項や修飾語と目的動詞の間に、主節の移動動詞の修飾語が現れ得る。

(5) a. 太郎が神田に本を自転車で買いに行った (Miyagawa (1987))

b. 太郎は本を神田に自転車で買いに行った (Matsumoto (1996: 239))

目的動詞が移動動詞と隣接している場合には、これらが一つの複雑述語を形成し、文全体が単文構造になっていると考ええると、(5)の語順は、単文内での修飾成分や項のスクランブリングとして説明することができる。

第二に、目的動詞と移動動詞が隣接しているか否かによって、否定極性表現「しか」と否定辞「ない」の振る舞いが異なる。目的動詞と移動動詞が離れている場合には、目的動詞の項などに、「しか」が接続し、主節の移動動詞に否定辞が現れると、不適格になる。

- (6) \*花子が雑誌しか借りに図書館に行かない (Miyagawa (1987))

接辞「しか」が否定辞と同じ節の内部になければならないことはつとに知られている(Oyakawa (1975), Muraki (1978))。<sup>1</sup>

- (7) a. 僕が[太郎がピザしか食べないの]を聞いた (Miyagawa (1987))

b. \*僕が[太郎がピザしか食べるの]を聞かなかった

(6)の不適合性は、目的動詞が独立した節をなすと考えると、(7b)と同じ様に説明できる。

- (8) \*[花子が[雑誌しか借りに]図書館に行かない]

これに対し、目的動詞と移動動詞が隣接している場合には、目的動詞の項や修飾語に「しか」が接続していても、主節の移動動詞に否定辞を含めることが可能である。<sup>2</sup>

- (9) 花子が図書館に雑誌しか借りに行かない (Miyagawa (1987))

目的動詞と移動動詞が隣接している場合には、これらが一つの複雑述語を形成し、全体が単文になっていると考えると(9)の適合性を説明することができる。

第三に、移動動詞が状態性の接辞と結びついた場合の格交替が挙げられる。可能を表す「(ら)れる」や願望を表す「たい」などが他動詞に接続すると、目的語の対格を主格に置き換えることが可能になる。

- (10) 本を読む 本を/が読める 本を/が読みたい

目的動詞と移動動詞が隣接していない場合には、移動動詞にこれらの状態性の接辞が接続しても目的動詞の目的語が主格によって標示されることはない。

- (11) a. 太郎が映画を/\*が見に新宿に行ける (Miyagawa (1987))

b. 僕はその本を/\*が買いに神田に行きたかった (Matsumoto (1992: 245))

一方、目的動詞と移動動詞が隣接している場合には、状態性の接辞が移動動詞に接続すると目的動詞の目的語を主格で標示することが可能になる。

- (12) a. 太郎が新宿に映画を/が見に行ける (Miyagawa (1987))

---

<sup>1</sup> 否定全般に渡って詳細に考察した片岡(2006: 123)でもこの一般化は正しいとされている。

<sup>2</sup> 同様の観察は Matsumoto (1996: 239)にも見られる。

- b. 僕はその本を/が買いに行きたかった (Matsumoto (1992: 245))

(12)において主格が可能であるという事実は、目的動詞と移動動詞が一つの述語を形成し、これ全体が状態性の動詞になっていると考えると説明できる。一方、(11)では、目的動詞が独立した節を形成しているため主格への交替が許されないと考えられる。

第四に、目的動詞と移動動詞が隣接するか否かと、副詞の解釈が相關することが挙げられる。Matsumoto(1996: 245)によると、目的動詞が移動動詞と隣接していない場合には、二つの副詞が独立に二つの動詞を修飾することができるのに対し、隣接している場合には、移動動詞しか修飾できない。そのため、(13a)は適格だが、(13b)は、矛盾した意味の副詞が一つの動詞を修飾するために不適格になる。

- (13) a. 太郎はゆっくり本を読みを急いで図書館に行った  
(Matsumoto (1996: 245))

- b. \*太郎はゆっくり本を急いで図書館に読みに行った

この事例も目的動詞が移動動詞と離れている場合には、前者が独立した節を構成しているのに対し、隣接している場合には一つの述語を形成し、全体が単文構造であることを示している。<sup>3</sup>

第五に、目的動詞と移動動詞が隣接しているか否かはとりたて詞の焦点解釈に関しても、違いを生じさせる。青柳(2006:123)は、とりたて詞は文の内部に現れていても、文全体を焦点とすることができるとして、次の例を挙げている。

- (14) 昨日のパーティーでは、花子がダンスを踊っただけでなく、  
a. 太郎がピアノを弾きもした  
b. 太郎がピアノも弾いた  
c. 太郎もピアノを弾いた (青柳(2006: 123))

(14)の各例とも、「花子がダンスを踊った」という出来事に加えて、「太郎がピアノを弾く」という出来事が起こったという解釈が可能である。

<sup>4</sup> 青柳はこの様な解釈を「広い焦点」と呼んでいる。しかし、焦点の拡大は無限にできる訳ではなく、とりたて詞の生起する節を超えて焦点を拡大することはできない。下の例では、「も」の焦点は埋め込み

---

<sup>3</sup> Matsumoto は(13 b)を f-構造において目的動詞と移動動詞が一つの述語を形成する例としている。

<sup>4</sup> この現象は青柳も触れている様に、Kuroda (1965)において指摘されている。沼田(2009: 68)も参照のこと。

節までであり、主文にまでは拡大しない。

(15) 花子は[太郎がピアノも弾いた]と言った (青柳 (2006: 149))

以上の一般化を青柳は目的動詞と移動動詞を含む構文にも応用している。目的動詞と移動動詞が隣接している場合には、主節まで焦点を拡大することができる。

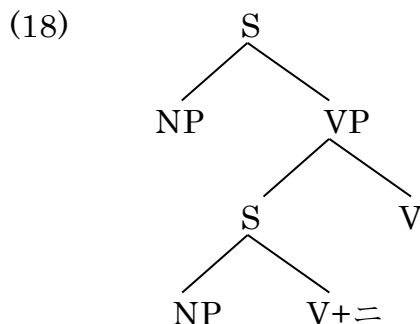
(16) 昨日の日曜日、太郎は家で小説を読んだだけでなく  
銀座へ映画も見に行った (青柳 (2006: 151))

目的動詞と移動動詞が隣接していない場合には、目的動詞の目的語に接続した「も」は目的語自身か、目的動詞の節までしか焦点を拡大できない。(17a)は(16)の様な状況では適当ではなく、(17b,c)の様な状況で適当になる。<sup>5</sup>

- (17) a. 映画も見に銀座へ行った  
b. 銀座では絵も見た  
c. 銀座では買い物もした

(16)と(17)の観察も、目的動詞が移動動詞から離れている時には複文構造を形成し、隣接している時には文全体が単文構造であることを示している。

ここまで、目的動詞と移動動詞が隣接している場合には、文全体が単文構造を形成し得ることを見た。しかし、目的動詞と移動動詞の隣接は、それらを含む文が単文構造をとることの十分条件とは言えない。目的動詞が独立した節を形成している場合、この節は主文中のどの位置にも現れ得るため、次の様な構造をとる可能性もある。



この様な構造的曖昧性が生じることを避け、間違いなく単文であることを示すために Matsumoto (1996: 241)は(5b)の様に目的動詞の項

---

<sup>5</sup> 青柳は目的動詞に時制がないために、焦点の拡大が許されると解釈している。しかし、(17)の例でも同じ目的動詞の形式が用いられているにも拘わらず、主節まで焦点を広げることができない。

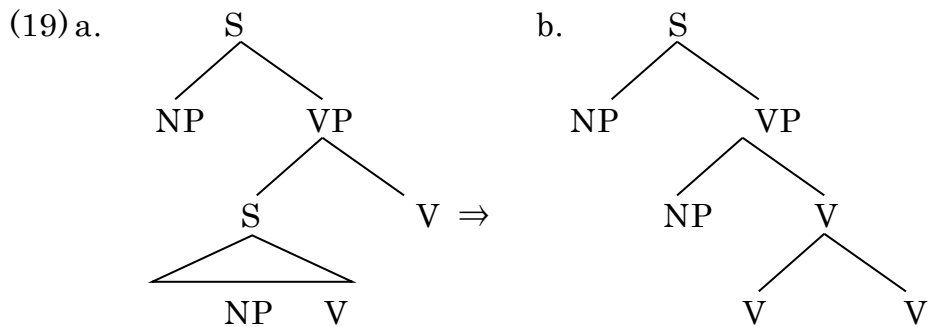
が、移動動詞の項や付加詞に先行している例や、(9)の様に「しか-ない」を含んだ例を議論に用いるとしているが、本稿でもそれに従う。

## 2. 派生説と非派生説

Miyagawa (1987)も Matsumoto(1996)も、上に見たように、目的動詞が移動動詞と隣接している場合には、単文構造を形成し、隣接していない場合には目的動詞が独立した節を形成し、文全体としては複文構造になるという点では一致している。

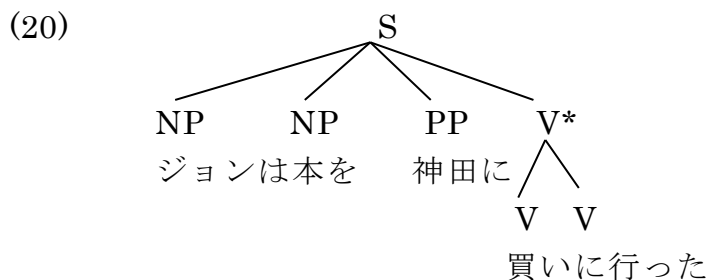
両者のもっとも顕著な違いは、目的動詞と移動動詞が隣接している場合に得られる単文構造が複文構造からの派生によって得られるとするか(派生説), 最初から単文構造をしているとするか(非派生説)という点にある。

Miyagawa (1987)は、派生説の立場から、概略、次の様な再構造化規則を提案している。



この派生では、複文構造の基底構造から、再構造化によって単文構造が得られるとされている。

一方、非派生説を取る Matsumoto (1992:256)は、目的動詞と移動動詞が隣接している場合は、次の様な単文構造を取るとしており、複文構造から単文構造への派生を認めない。<sup>6</sup>



<sup>6</sup> 文の述語以外の部分に、Miyagawa(1987)は階層構造を Matsumoto(1996)は非階層的な構造を仮定しているが、この違いは、彼らの議論にも、本稿の議論にも非関与的である。

(20)では、仮に V\*と表記された動詞の投射の下に統語的に独立した二つの動詞が支配されているが、全体としては単文構造である。<sup>7</sup>

派生説の問題点の一つとして、複文構造から単文構造へと派生するにも拘わらず、複文構造の段階が存在することを示す事実が存在しないことが挙げられる。加えて、Matsumoto(1996: 258)が指摘する様に、目的動詞と移動動詞が隣接している場合と離れている場合で意味が異なることが問題となる。

(21) a. 太郎はスーツをメイシーズエンポリウムに買いに行った  
Matsumoto (1996: 258)

b. 太郎はスーツを買いにメイシーズとエンポリウムに行った  
まず、(21a)では(5b)と同様、目的動詞と移動動詞が隣接し、かつ、目的動詞の項が移動動詞の項に先行しているため、(21a)が複文である可能性はなく、単文であることは明らかである。Matsumotoによると、(21a)は、主語「太郎」は二つの店で、それぞれ「スーツ」を買うことを意図して移動したことを含意しており、従って、少なくとも二つの「スーツ」を買ったことになる。一方、(21b)では、主語「太郎」は「スーツ」を買うことは意図しているが、二つの店で買ったことは必ずしも含意していないとしている。即ち、どちらか一方には値段を比べるためだけに行った場合でも(21b)は適格となるとしている。

また、着点は移動の終わった直後に目的動詞の動作が行われる場所を示しているとし、次の様な例を挙げている。

(22) a. 太郎は1月から始まるミュージカルを見にクリスマスの  
ニューヨークに行った Matsumoto (1996: 258)

b. 太郎は1月から始まるミュージカルをクリスマスのニュー  
ヨークに見に行った

目的動詞と移動動詞が隣接していない(22a)は、1月まで滞在し、それから「ミュージカル」を見た場合には真であるが、(22b)はその場合でも真とは成り得ない。Matsumotoは複文構造と単文構造とで意味が異なることは派生説では説明できないとしている。

目的動詞と移動動詞が隣接している場合には(18)の様に複文構造を形成している可能性と、文全体が単文構造をなしている可能性がある。事実、目的動詞と移動動詞が隣接していても、目的動詞の項と移動動詞の項が入れ替わっていない(23)の様な場合、(22a)の解釈が可能であ

---

<sup>7</sup> Matsumotoは二つの動詞からなる構成素の特性が不明確であるとして、V\*という表記を採用している。

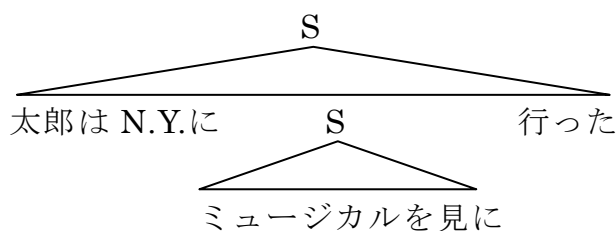
る。このことは目的動詞と移動動詞が隣接していても複文構造が形成され得ることを示している。

(23) 太郎はクリスマスのニューヨークに1月から始まるミュージカルを見に行った

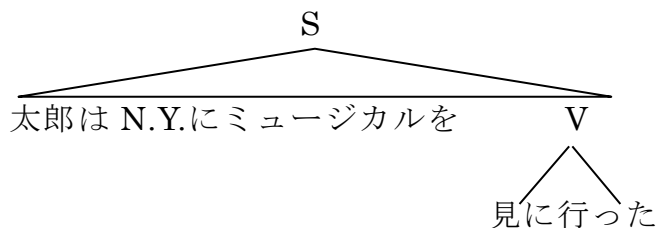
派生説では、複文から再構造化によって単文構造が得られるとしている。目的動詞と移動動詞が隣接しつつも(22a)の解釈が可能な(23)が再構造化を経ると、その解釈ができなくなり(22b)の解釈しかできなくなることは派生説では説明できない。

一方、非派生説では、複文構造と単文構造は、構造が異なり、お互いに派生関係にないため、両者の意味が異なることと矛盾しない。

(24) a.



b.



(24a)では、場所項は移動動詞の項であり、埋め込み節の目的動詞を修飾する位置になく、一方、(24b)では目的動詞と移動動詞を修飾できる位置にある。この構造的差異が上述の意味の違いをもたらすと考えられる。

派生説と非派生説の第二の違いは、目的動詞に接続するとりたて詞の扱いである。Miyagawa は再構造化を阻止するのは、(1a)の様な移動動詞の着点である句(最大投射)だけでなく、とりたて詞も再構造化を阻止するとしている。即ち、目的動詞と移動動詞の間にとりたて詞が介在する場合は(19a)の様な複文構造であるとしている。Matsumoto(1992: 242)は、(22)に見る様に単文構造であっても、二つの動詞は統語的に独立した語であるためとりたて詞の挿入が可能であるとしている。<sup>8</sup>

Miyagawa はとりたて詞が挿入されている場合には、複文では許さ

<sup>8</sup> Matsumoto は単文であってもとりたて詞が挿入できることから、動詞 + (u)le と移動動詞が統語的に独立しているとしている。



れない「しか-ない」との共起，移動動詞の項と目的動詞の入れ替え，願望文でのヲ・ガ交替が不可能になるとしている(判断は Miyagawa のもの)。

- (25) a. \*僕は本しか読みには行かないが  
b. \*太郎は本を自転車で買いには行ったが  
c. 僕はビールを/\*が買いには行けるが

しかし，これらの例が，Miyagawa の言う通り不適格であるかには疑問がある。事実，(25b)と，同じ構造の文が，Matsumoto (1996: 242) では適格とされている。

- (26) 太郎はその本を神田に買いには行ったが

(25)の文法性を確認するため，数名の日本語話者を対象に(25)の類例をいくつか用いて，調査を行った。<sup>9</sup> まず，(26b)と同じパターンの例文(27)は，適格性が高いと判断された。<sup>10</sup>

- (27) 山田は野球を神宮に見には行ったが，雨だった

(25a)に相当する例文(28)も適格性が高いと判断された。<sup>11</sup>

- (28) 僕は図書館に週刊誌しか読みには行かないが

(25c)に相当するヲ・ガ交替の例のみが，上記二つの例と異なり，調査対象者の判断において，文法性が低いという判断を受けた。<sup>12</sup>

- (29) \*?/?今日は映画が見には行けるが(早く帰ってこなければならぬ)

この例は，一見，とりたて詞が再構造化を阻止している様に見える。しかし，複合移動動詞以外の複雑述語でも状態性の接辞を付け加えた場合，ヲは許されるが，ガの容認度が下がるという指摘は柴谷(1978:266)にも見られる。

- (30) 今度はこの本を/\*?が読み始めたい

この例では，統語的複合動詞が含まれているが，統語的複合動詞の様に，そもそも取り立て詞を構成素の間に挿入できないものでもヲ・ガ交替が阻止されることを考慮に入れると，(25c)の不適格性が，再構造

<sup>9</sup> 6人の話者(いずれも言語学の研究者)を対象に各パターンにつき二つの例文を提示し，完全に適格なものを3，完全に不適格なものを0とする4段階評価で判断してもらった。

<sup>10</sup> (27)は6人中1名が1.5，他の5名はとりたて詞が入らない例と同様，完全に適格な3と判断した。

<sup>11</sup> 3名の話者に関して容認度の低下が見られた(2,2.5,1.5)と判断したが他の3名は完全に適格な3と判断した。

<sup>12</sup> 6名の判断した値(平均値)は0,1,1,2,2.5,3となった。

化が阻止されるために起こることを示しているとは必ずしも言えないことになる。

とりたて詞が編入を阻止し、複文構造が維持されるとして挙げられた(27)の例文の内、二つは完全に適格であることは、Miyagawa の主張を裏付ける根拠を著しく弱めており、むしろ、目的動詞と移動動詞の間にとりたて詞が介在していても、目的動詞と移動動詞の連続が単文構造を取りうることで支持される。

### 3. 韓国語との対照言語学的検討

韓国語にも、日本語と同様に、動詞のある活用形態が、移動動詞と結びついて移動の目的を表す構文があり、김영희 (1988), 흥재성(1989), Wada(2006)などの論考がある。動詞の語幹に接辞-(u)le が接続した形式は移動動詞とのみ共起するが、目的動詞(以下、目的動詞)は日本語の目的動詞と同様に、移動動詞の直前にも現れ得るし、移動動詞から離れた位置にも現れ得る。<sup>13</sup>

- (31) a. Chelswu-nun wuli cip-ey swul-ul masi-le wa-ss-ta  
          チョルス C-Top ウチ-Dat 酒-Acc 飲む-le 来る-Past-Dec  
      b. swul-ul masi-le Chelswu-nun wuli cip-ey wa-ss-ta  
          酒-Acc 飲む-le チョルス C-Top ウチ-Dat 来る-Past-Dec  
          チョルスはうちに酒を飲みに来た

目的動詞を含む構文は、これ以外の点でも日本語の目的動詞を含む構文と類似している。第一に、目的動詞が移動動詞と隣接している場合には単文構造をなすことができ、離れている場合には複文構造をなす。単文構造か複文構造かは、日本語の「しか-ない」に対応する pakkey と否定辞により示すことができる。まず、pakkey と否定辞の構造関係を概観する。H.-S. Choe (1988:258), Kuno and Kim (1999)によると、接辞 pakkey は必ず否定辞と共起し、pakkey が接続した句と否定辞は同一節になければならない。

- (32) a. Inho-ka [s Ywumi-ka koki-pakkey mek-ci anh-nun-ta]  
          -ko mit-nun-ta (Kuno and Kim (1999))  
          インホ-Nom ユミ-Nom 肉-pakkey 食べる-Comp Neg-Pres-Dec  
          -Comp 信じる-Pres-Dec  
          インホがユミが肉しか食べないと信じている  
      b. \*Inho-ka [s Ywumi-ka koki-pakkey mek-un-ta]-ko mit-ci

<sup>13</sup> 以下では、-(u)le のグロスとして-le を用いる。

anh-nun-ta.

인ホ-Nom ムミ-Nom 肉-pakkey 食べる-Pres-Dec-Comp  
信じる-Comp Neg-Pres-Dec

- c. \*Inho-pakkey [s Ywumi-ka koki-lul mek-ci anh-nun-ta]  
-ko mit-nun-ta

인ホ-pakkey ムミ-Nom 肉-Acc 食べる-Comp  
Neg-Pres-Dec-Comp 信じる-Pres-Dec

- d. Inho-pakkey [s Ywumi-ka koki-lul mek-nun-ta]-ko mit-ci  
anh-nun-ta

인ホ-pakkey ムミ-Nom 肉-Acc 食べる-Pres-Dec-Comp  
信じる Comp Neg-Pres-Dec

인호しかユミが肉を食べると信じていない

홍재성(1989: 5)によると, 目的動詞は(長形)否定辞と共起しない。

14

- (33) \*Chelswu-nun Yenghuy-lul manna-ci anh-ule tapang-ey  
naka-ss-ta.

チョルス-Top ヨンヒ-Acc 会う-Comp Neg-le 喫茶店-Dat  
出かける-Past-Dec

従って, 上の(33)の様な埋め込み文と異なり, pakkey と否定辞を含むパターンには主節の移動動詞に否定辞が現れる二つのパターンしかないことになる。<sup>15</sup>

目的動詞が移動動詞から離れた位置に現れる場合, 目的動詞の項に pakkey が, 移動動詞に否定辞がある場合は不適格になる。

- (34) a. \*khokkil-pakkey po-le Yengsuni-nun tongmwulwen-ey  
ka-ci-anh-ass-ta.

象-pakkey 見る-le ヨンスン-Top 動物園-Dat 行く  
-Neg-Past-Dec

- b. Yengsuni-pakey khokkili-lul tongmwulwen-ey po-le

<sup>14</sup> 同様の指摘は Wada(2006)にも見られる。

<sup>15</sup> 홍재성(1989: 6)参照。

i) \*Chelswu-nun Yenghuy-lul manna-ci anh-ule tapang-ey  
naka-ss-ta.

チョルス-Top ヨンヒ-Acc 会う-Comp Neg-le 喫茶店-Dat  
出かける-Past-Dec

韓国語には述語に否定辞が後続する長形否定形と否定辞が述語に先行する短形否定形が存在する。後述する様に, 短形否定はある条件では動詞+(u)le と共起する。

ka-ci anh-ass-ta.

ヨンスン-Top 象-pakkey 見る-le 動物園-Dat 行く  
-Neg-Past-Dec

この事実は、目的動詞が独立した節をなしており、その内部に現れる pakkey と主節の否定辞が同じ節にないことを示している。

一方、目的動詞と移動動詞が隣接している場合には、目的動詞の項に pakkey が接続し、かつ主節の移動動詞に否定辞がある場合は適格となる。

(35) a. Yengswuni-nun khokkili-pakkey tongmwulwen-ey po-le  
ka-ci anh-ass-ta. (Wada (2006))

ヨンスン-Top 象-pakkey 動物園-Dat 見る-le 行く  
-Neg-Past-Dec

ヨンスンは象しか動物園に見に行かなかった

b. Yengswuni-pakkey khokkili-lul tongmwulwen-ey po-le  
ka-ci anh-ass-ta.

ヨンスン-pakkey 象-pakkey 動物園-Dat 見る-le 行く-Neg  
-Past-Dec

ヨンスンしか象を動物園に見に行かなかった

(35a)の適格性は、目的動詞の項と移動動詞が同じ節内にある、即ち、文全体が単文構造であることを示している。

第二に、目的動詞と移動動詞が隣接していない場合、移動動詞の場所項と、目的動詞の項を入れ替えることはできない。

(36) a. Yengswuni-nun tongmwulwen-ey khokkili-lul po-le  
pesu-lo ka-ss-ta.

ヨンスン-Top 動物園-Dat 象-Acc 見る-le ヨンスン-Top バス-Inst  
行く-Neg-Past-Dec

ヨンスンは動物園に象を見にバスで行った

b. \*Yengswuni-nun khokkili-lul tongmwulwen-ey po-le  
pesu-lo ka-ss-ta.

ヨンスン-Top 象-Acc 動物園-Dat 見る-le ヨンスン-Top バス-Inst  
行く-Neg-Past-Dec

目的動詞と移動動詞が隣接している場合には、目的動詞の項と移動動詞の場所項とを入れ替えることができる。

(37) a. Yengswuni-nun tongmwulwen-ey khokkili-lul po-le  
ka-ss-ta.

ヨンスン-Top 動物園-Dat 象-Acc 見る-le ヨンスン-Top 行く  
-Neg-Past-Dec

- b. Yengswuni-nun khokkili-lul tongmwulwen-ey po-le  
ka-ss-ta.

ヨンスン-Top 象-Acc 動物園-Dat 見る-le ヨンスン-Top 行く  
-Neg-Past-Dec

ヨンスンは動物園に象を見に行った

この事実も、目的動詞と移動動詞が離れている場合には目的動詞が独立した節をなし、その項を移動動詞の項の前に置くことは、節外への移動となり不適格になると説明できる。また、二つの動詞が隣接している場合に、二つの項の入れ替えが可能なことは、これらの項が同節内にある、即ち、全体が単文構造であることを支持する。

以上の様に、韓国語の目的動詞と日本語の目的動詞は極めて似通っている。<sup>16</sup>しかし、韓国語には日本語と異なり、短形否定と呼ばれる否定の形式があり、目的動詞と共起する場合、興味深い振る舞いを示す。<sup>17</sup>

まず、短形否定について概観しておこう。否定辞 *an* は述語に先行するが、述語の直前にしか現れ得ない。

- (38) a. Chelswu-nun ku chayk-ul an ilk-ess-ta.

チョルス-Top その本-Acc Neg 読む-Past-Dec

チョルスはその本を読まなかった

- b. \*Chelswu-nun an ku chyak-ul ilk-ess-ta.

チョルス-Top Neg その本-Acc 読む-Past-Dec

述語の直前にしか現れないため、否定辞 *an* を接頭辞とする立場もあるが、Sells(1994)は形態音韻的な制約に基づいて、*an* が統語部門で述語と結合するとしており、本稿でもその立場に従う。

上で触れたように、長形否定は目的動詞と共起しないが、目的動詞と移動動詞が隣接していない場合、同様に、目的動詞の前に *an* が現れることはない。

- (39) \*[chinkwu-wa an ssawu-le] Minswu-nun cip-ey ka-ss-ta

友達-With Neg 争う-le ミンス-Top 家-Dat 行く

-Past-Dec

<sup>16</sup> 但し、韓国語では、動詞+(u)le と共起する動詞の範囲は日本語より広い様である。홍재성(1989:15)の網羅的なリストを参照。

<sup>17</sup> 短形否定には他に不可能を表す *mos* という形式もある。

興味深いのは、目的動詞が移動動詞と隣接している場合である。二つの動詞が隣接している場合に限り、否定辞 *an* は目的動詞の直前に現れ得る。<sup>18</sup>

(40) a. *an po-le ka-l ke-yeyyo?* (Imtaykacok p. 26)

Neg 見る-le 行く-でしょう

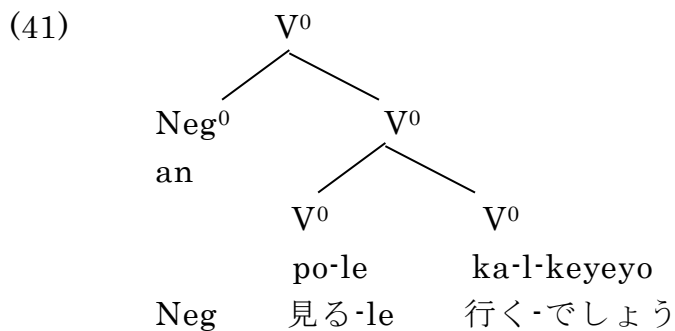
見に行かないのですか

b. *sacangnim-i ocwum-to mos nwu-le ka-key hay-se*  
(Kil (297))

社長-Nom オシッコ-も Neg 排尿する-le 行く-Comp する

社長がオシッコもできないようにして

上に見たように、目的動詞が否定形と共起しないことから、Wada (2006)ではこの様な事実は、否定辞が目的動詞と構成素をなすのではなく、目的動詞と移動動詞が形成する構成素と結合していることを支持するとして、次の様な構造を提案している。<sup>19</sup>



更に、この構造からは否定のスコープは二つの動詞全体であると予測されるが、홍재성(1989: 5), Wada(2006)で指摘されているように、否定辞の直後の目的動詞のみを否定する解釈は許されない。

(42) *Chelswu-nun Yenghuy-lul an manna-le naka-ss-ta*

홍재성(1989,5)

チョルス-Top      ヨンヒ-Acc      Neg 会う-le 出かける

-Past-Dec

チョルスはヨンヒに会いにでかけなかった。

Neg > 会いに出かける, \*出かける > Neg > 会いに

(41)において、目的動詞と移動動詞は語のレベルである V<sup>0</sup> を形成して

<sup>18</sup> (40)の例は小説から引用した例である(Wada (2006))。

<sup>19</sup> 語が結合して語レベルの構造を作るこの統語構造は Sells (1994), Iida and Sells (2008)で提案されているものに従っている。

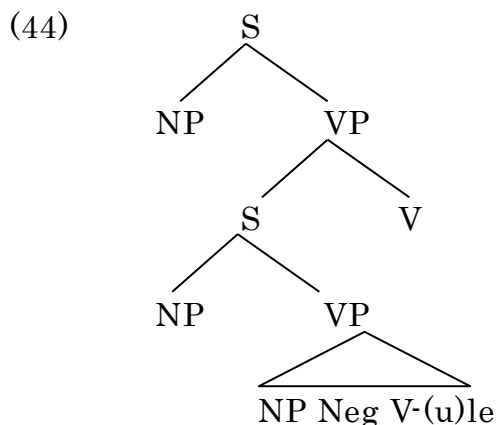
いるが、この構造は、否定辞 *an* の特性から導ける。否定辞 *an* は、述語に隣接していなければならない、述語から離れた位置に現れることはできない。

(43) a. Chelswu-nun koki-lul an mek-ess-ta  
 チョルス-Top 肉-Acc Neg 食べる-Past-Dec  
 チョルスは肉を食べなかった

b. \*Chelswu-nun an koki-lul mek-ess-ta  
 チョルス-Top Neg 肉-Acc 食べる-Past-Dec

否定辞 *an* の分布に対する制約から、*an* は VP/V'等の句には接続せず、V<sup>0</sup>にのみ接続することが分かる。この一般化から、目的動詞と移動動詞が語レベルであることが導かれる。<sup>20</sup>

V<sup>0</sup>にしか接続しない否定辞 *an* が目的動詞の前に現れるという事実は、派生説にとって、決定的な問題になる。派生説を取る場合、語順を考慮すると、次の様な複文構造が基底に存在することになる。



(44)の様に目的動詞が独立した節を形成する場合には、目的動詞と否定辞が共起しないことは(39)で触れた通りであり、次の様な選択制限が存在していると考えられる。<sup>21</sup>

(45) \*[*an* V-(u)le], \*[V-ci *anh-ule*]

しかし、派生説を取る場合、目的動詞と移動動詞が隣接している場合に限り（かつ、再構造化も起こる場合に限り）、(45)の選択制限を破ることができる、即ち、目的動詞節の内部に否定辞が存在し得るという場当たり的な仮定をしなければならなくなる。一方、(41)の様な非派生説を取ると、否定辞は目的動詞とではなく、目的動詞と移動動詞からなる構成素と共起していることになるため、(45)の選択制限の違

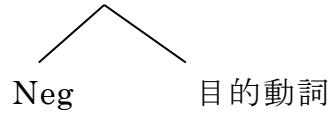
<sup>20</sup> Sells (1994)も参照。

<sup>21</sup> Wada (2006)を参照。

反にはならない。

更に、派生説を取る場合、少なくとも再構造化の前の段階では、否定辞と目的動詞が構成素をなしていることになる。

(46)



否定辞 **an** は直後の述語を否定するので、この構造からは、目的動詞のみを否定する解釈が許されることが予測される。しかし、(40)に見たように、その解釈は許されないが、派生説ではこの事実を説明することができない。

これに対し、非派生説では、(46)の様な不適格な構造は(45)の選択制限の違反として排除できる。否定辞 **an** が接続し得るのは目的動詞と移動動詞が結合した  $V^0$  レベルに限られるため、誤った予測をすることなく、目的動詞と移動動詞の両方を否定する解釈が導ける。

最後に、派生説では、否定辞が目的動詞と移動動詞の両方を否定する解釈しかないという(42)の事実も説明できない。日本語の複合移動動詞に関する Miyagawa(1987)の再構造化の定式化からは、ここで論じている韓国語の構文において、具体的にどのような派生の過程を経るかは不明確ではあるが、否定辞 **an** が目的動詞と移動動詞から成る構成素と姉妹関係を持つ構造を派生するのは困難である。

上に見たように、韓国語の複合移動動詞は、日本語の複合移動動詞と極めて似通った特徴を有しており、日本語と同じ構文であることを強く示唆する。その上で、短形否定辞に関する事実は、韓国語では派生説が成立する余地がなく、非派生説による説明しか成立しないことを示している。この結論は、Matsumoto が指摘した、目的動詞が移動動詞と隣接するか否かで生じる微妙な意味の違いと共に、日本語でも非派生説を強く支持し、派生説が成立しないことを示している。

#### 4. 日本語の複合移動動詞の投射レベル

前節では、韓国語の複合移動動詞において目的動詞と移動動詞が、それぞれ統語的に独立しながらも、語レベル、即ち、 $V^0$  を形成することを見た。その際、 $V^0$  レベルの語としか結合しない、否定辞 **an** を用いて、議論を行った。

日本語に関しては、(20)に示した様に、Matsumoto (1996:256)は、複合移動動詞が一つの構成素を成すとしながらもその投射レベルに



関しては保留している。

本節では、韓国語の否定辞 *an* に相当するテストとして「方」接辞化が、日本語の複雑述語のサイズを決めることを示し、日本語の複合移動動詞も韓国語の複合移動動詞と同様に、 $V^0$  を形成することを示す。

「方」は動詞を名詞化するが、その際、項は動詞句の内部に現れる主格、対格などの格を取ることができず、属格を取らなければならないことは広く知られている。

- (47) a. 太郎が本を読む  
b. 太郎の本の読み方  
c. 太郎が本の読み方

名詞の修飾要素は、連体形を取れなければ、「の」で標示されなければならないので、上記の事実は、「方」が名詞化するのには動詞句や節の様な大きな単位ではなく、動詞のみであることを示している。即ち、「方」が名詞化しているのは  $VP/V'$  ではなく、 $V^0$  レベルの語であると言うことができる。

複合移動動詞は、非派生動詞と同様に、接辞「方」による名詞化が可能である。複合移動動詞を「方」により名詞化すると、目的動詞に「の」は必要とされず、むしろ「の」が介在すると不適格になる。

- (48) a. 切符を買いに行く  
b. 切符の買いに(\*の)行き方

- (49) a. ボールを取りに行く  
b. ボールの取りに(\*の)行き方がぎこちない

この事実は、「方」が複合動詞全体を名詞化していると考ええると容易に説明できる。また、複合移動動詞を「方」で名詞化できるという事実は、複合移動動詞の投射レベルが非派生動詞と同じ、即ち  $V^0$  レベルであることを示している。

## 5. まとめ

目的動詞と移動動詞が隣接する場合、単文構造の特徴を示すことが知られているが、単文構造が、複文構造から再構造化によって派生するとする派生説と、最初から単文構造であるとする非派生説とが対立している。非派生説を支持する事実として **Matsumoto (1996)** は意味的な差異を挙げている。本稿では、韓国語の複合移動動詞に否定辞が先行し、否定が複合移動動詞全体をスコープとする解釈のみが存在し、目的動詞のみを否定する解釈がないことを指摘した。この事実は、派

生説では説明することができない一方で、非派生説は容易に説明することができることから、非派生説が支持されることを示した。

また、韓国語に関しては否定辞の分布に、日本語に関しては「方」名詞化に基づいて、いずれの言語においても目的動詞と移動動詞が複合動詞を形成する場合、投射のレベルが、非派生動詞と同じく  $V^0$  であることを示した。

## 謝辞

本研究は JSPS 科研費 25370433 の助成を受けたものです。

## 参考文献

- 青柳宏 (2006) 『日本語の助詞と機能範疇』 東京：ひつじ書房
- Choe, Hyon Sook (1988) *Restructuring Parameters and Complex Predicates-A Transformational Approach-*, Ph.D. Dissertation, MIT.
- 홍재성 (1989) 『현대 한국어 동사구문의 연구』 서울:담출판사
- Iida, Masayo & Peter Sells 2008 “Mismatches between Morphology and Syntax in Japanese Complex Predicates,” *Lingua* 118, 947-968.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 東京：ひつじ書房
- 片岡喜代子 (2006) 『日本語否定文の構造:かき混ぜ文と否定呼応表現』 東京：くろしお出版
- 김영희(1988) 『한국어통사론의 모색』 서울：한국문화사
- Kuno, Susumu & Young-joo Kim (1999) The Syntax and Semantics of the Man and Pakkey Constructions, *Harvard Studies in Korean Linguistics* 8, 436-456.
- Kuroda, Shige-Yuki (1965) *Generative Grammatical Studies in the Japanese Language*, Ph.D.Dissertation, MIT.
- Matsumoto, Yo (1991) On the Lexical Nature of Purposive and Participial Complex Motion Predicates in Japanese, *BLS* 17, 180-191.
- Matsumoto, Yo (1996) *Complex Predicates in Japanese: A Syntactic and Semantic Study of the Notion 'Word'*, Kurosio Publishers, Tokyo
- Miyagawa, Shigeru (1987) Restructuring in Japanese, in Imai,

- Takashi and Mamoru Saito (eds.), *Issues in Japanese Linguistics*, Dordrecht: Foris, 273-300.
- Muraki, Masatake (1978) The sika nai Construction and Predicate Restructuring, in Hinds, John & Irwin Howard (eds.), *Problems in Japanese Syntax and Semantics*, 155-177.
- 沼田善子 (2009) 『現代日本語とりたて詞の研究』 東京：ひつじ書房
- Oyakawa, Takatsugu (1975) On the Japanese Shika-nai Construction, 『言語研究』 67, 1-20.
- Sells, Peter (1994) Sub-phrasal Syntax in Korean, *Language Research* 30, 395-406.
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』 東京：大修館書店
- Sugioka, Yoko (1984) *Interaction of Derivational Morphology and Syntax in Japanese and English*, Ph.D.Dissertation, Chicago University.
- Wada, Manabu (2007) Complex Motion Predicates and the Pre-verbal Negative an in Korean, *KLS* 27, 130-139.
- 和田学 (2011a) 二つの語彙的緊密性-韓国語(と日本語)の複合動詞-, 『山口大学文学会志』 61, 83-104.
- 和田学(2011b) 韓国語の語彙的複合動詞, 『九州大学言語学論集』 32, 249-265.
- Wada, Manabu 2012 A Comparative Study of Korean and Japanese Complex Predicates, *Harvard Studies in Korean Linguistics* 14, 475-486.

# Complex Motion Predicates in Japanese and Korean

Manabu Wada  
(Yamaguchi University)

Japanese has a construction called Complex Motion Predicate (CMP). CMP constitutes of a motion verb and a verb directly preceding the motion verb that expresses the purpose of the motion. CMP includes two verbs, but it is well-known that the sentence including CMP shows mono-clausal properties.

In previous studies, some claim that the mono-clausal structure is obtained by restructuring a bi-clausal structure (Derivational Analysis: Miyagawa (1987)), while others argue that CMP is mono-clausal, denying the re-structuring (Non-derivational Analysis: Matsumoto (1996)).

As observed in Wada (2007), Korean also has CMP. When Korean CMP appear with the pre-verbal negative *an*, it negates the whole CMP, but cannot negate only the purposive verb. The Derivational analysis, which assumes a bi-clausal structure for CMP, predicts that the latter interpretation is possible, since *an* directly precedes the motion verb, which is the head of the embedded clause.

On the contrary, the Non-derivational Analysis, which assumes that the CMP constitutes a constituent, can account for the fact, since *an* is combined with the constituent in the analysis.

In addition, based on the distribution of *an* for Korean, and *kata*-nominalization for Japanese, we conclude that the projection level of the CMP is  $V^0$ , in the sense of the sub-phrasal syntax, proposed by Sells (1994).